

北海道師範塾
「教師の道」

塾頭通信

第423号 平成24年10月29日

クラス会

一昨日（10月27日）、中学時代のクラス会があり、恐る恐る出席しました。恐る恐るというのは、久しぶりに会う同級生達の変わりよう（勿論自分自身もそうなのですが）を見るのが少し怖いような気がしたからですが、会場に入った瞬間、そんな心配は一瞬に氷解してしまいました。

私が卒業した中学校は、岩見沢市立緑中学校です。卒業が昭和37年ですから、卒業以来50年、実に半世紀が経ちました。そう考えると、自分も随分と頑張ってきたような気がします。

私が、同級生の皆さんに逢うのは久しぶりで、少なくとも10年は経っていると思います。

私も高齢者なら、同級生も高齢者（これは当たり前ですが）。会っても顔も分からないのではないかと心配でした。確かに、皺も増え、頭もかなり薄くなったりと、皆さんそれぞれ相当変化してしまっているのですが、それでもちゃんと昔の面影が残っています。私も「よーちゃん」と、気恥ずかしくなるような昔の名前で呼ばれたりして、同級生はいくつになっても同級生だと、至極当たり前のことに納得させられます。

卒業アルバムを見ると、皆初々しくて、女性もこんなに可愛らしかったのかと、目の前の実物と見比べるのも失礼ながら、改めて50年という時間の長さや重さを実感したところです。勿論、それは、女性だけでなく男性も一緒に、皆さんすっかり「じいちゃん」「ばあちゃん」になっていて、「良く元気で参加できたね」と喜び合い、健康を気遣ったりと、楽しい数時間を過ごさせていただきました。

卒業時の名簿を見ると、49名の名が連なっています。担任の先生は2年前に亡くなっており、同級生も6名が亡くなっています。また、現在の居所が不明の者も7名おり、寂しい限りです。

このクラス会は、地元に残っている方たちの骨折りで5年に一度くらいのペースで開催してきました。今回は、住所が確認されている者の内、クラス会に出席したのは17名、約半数の方々が参加できましたが、こうしたクラス会はいつまで続けられるだろう、というのが参加者の共通の思いでした。

もうこれからは5年先はどうなっているか分からないから、会える内に会うよう

にした方が良いのではというような話になりましたが、そんな会話が冗談ではなく聞こえてしまいます。

それぞれの顔に人生の春秋を刻みながら楽しんで生きている、そんなクラス仲間の姿を見て、私も元気付けられました。

帰りの列車の中、暗闇の中で飛び去っていく町の明かりに目をやりながら、また再び彼らと元気で会えるだろうかと、祈るような気持ちで帰路に着いた一日でした。

（塾頭：吉田 洋一）